

# 民具マンスリー

第 27 卷 3 号

東京のラオヤの仕事とその周辺 …………… 友野千鶴子(一)

中国・江南の渡り職人についての断章 …………… 菅 豊(19)

神奈川大学日本常民文化研究所

第一九九四年六月十日発行(毎月一回十日発行)  
第二七卷三三号(通巻三十一号五)

一九九四年六月十日発行(毎月一回十日発行)

民具マンスリー

第二七卷三号

一九九四年六月五日印刷  
一九九四年六月十日発行

編集 神奈川大学日本常民文化研究所  
発行 神奈川大学

印刷所 神奈川新聞社出版局  
神奈川大学  
横浜市神奈川区六角橋字

電話 (048)566-1131 郵便番号 221-0201  
振込口座 02568-13320

購読年会費 三五〇〇円(送料含)  
定 価 三五〇円

(注9) 中島嘉一郎日記「年代帳」明治35—昭和14年による。

(注10) 雁首・吸口やノベギセル製作を職人間では「きせる製作」といっているが、「きせる」の語は一本の面体としてのきせるも指すためまぎらわしい。このため、本稿では可能な限り「雁首・吸口、ノベギセルの製作」等細かく表記する。

(注11) 中島嘉一郎日記「伊勢参宮日記帳」大正4年

(注12) 「7日の市に出かけた。」という

(注13) 富士裾野から仕入れていたがズルムキというラオ竹用に竹の皮を剥く商売の人が平成2年、採算が合わないのをやめてしまい駐車場に転業してしまった。このことは留四郎だけでなく、数少ないきせる関係の職人にとっても大きな問題だったらしい。特別に作る旨申し出もあつた様子だが、1万本作らないと手間にならないはずなので断つてゐるという。

(注14) 「箱根山の向こうから任入れていた」といふ。(注13参照)

(注15) 近年の留四郎の写真や報告書のイラストでは(写真21)のようにカマが乗

っていないものが多い。カマは壊れやすく故障することがあり、また、カマに水を入れて乗せるとラオグルマの目方もかなり違つてゐるため最近はおまわり積んで歩かない様子である。仕事に使う材料を温め、湯を沸かし、その蒸気で笛を鳴らし客に來訪を告げるラオヤのドレドマークのようなものであるが、上記の理由と笛が騒音扱いされる場合もあることから持ち歩かない。七輪で代用している。また、カマが乗るとラオグルマの屋根の上に煙出しの煙突と笛(大笛・小笛)が突き出して見える。同様なカマの資料がたばこと塩の博物館に収蔵されている。

(注16) 写真では暖をとるための七輪で温めているが、ラオカマの焚き口の火を昔は使うことが多かった(注15参照)。

(注17) 江戸東京博物館で収蔵している留四郎作のラオギセル製作工程資料を見ると竹の根元に近いより太い方を雁首側にもつてきている。留四郎使用の雁首・吸口の多くが新潟産のクダリギセルで、「クダ」と呼ばれる雁首の太さが吸口の太さ比べ少し太いものだからである。

(注18) 雁首に差し込む前にラオを温めてそ

のまま差し込む、温めてシメイタでしめてから差し込む等、ラオと雁首の相性などによって細かい作業手順は当然異なつてゐる。ただし、温めて固定するという点はかわらない。また、シメイタでしめる竹が弱くなるのできればしめないようにするのだという。

(注19) (注10参照)

(注20) メオトギセル。火皿を中心に管が二方に分かれていてその先に吸口がある。つまり、同じ火皿のたばこを2つの吸口を使って一度に2人で味わえるきせる。

〈参考文献〉

たばこと塩の博物館「日本の喫煙風俗と喫煙具」平成元年

『広辞苑』昭和44年 岩波書店

たばこと塩の博物館「きせる」昭和63年

三谷一馬「定本江戸商売図絵」昭和61年 立風書房

三谷一馬「江戸職人図聚」昭和59年 立風書房

『日本国語大辞典』1987 小学館

『日本民俗事典』昭和47年 大塚民俗学会

東京都江戸東京博物館企画・制作・ビデオ(LD)「羅字屋」1992年 (株)民族文

化映像研究所製作

## 中国・江南の渡り職人についての断章

菅 豊

国立歴史民俗博物館

ある渡り職人との出会い

一九九二年九月二日、私は中国浙江省寧波市北侖区溪東村烏石岙にいた。烏石岙は寧波市の中心部より東に約二四キロ離れた、太白山の麓の一小村である。人口一五三名、戸数四八戸の村は、山巒の中に隠れるようにして立地している。集落の谷間に広がる耕作地では稲作とともに果樹栽培が行われており、また背後の山間部では鳥獣狩猟が行われていた。私はここで、在来家畜の伝統的飼育技術について調査するつもりであった。

烏石岙に着くと、調査に協力してくれる予定になっていた王行海氏が既に村の

入口まで出迎えに来ていた。初対面の私と挨拶もそこそこに、彼は早速自分の家へと案内してくれた。細く暗い路地を歩いていくと、あちこちから放し飼いにされているニワトリが飛び出してくる。ニワトリは調査中最も関心を持っていた対象だけに、ここぞとばかり写真を撮り始めた。余りにも熱中し過ぎたのか、王氏のせつ々しような視線が私に注がれているのに気づいた私は、そそくさと切りあげて彼の後を足早に歩いていった。

狭い門をくぐると彼の家の中庭に出た。王氏は強い日差しを避けて、風の通る軒下に席を設けてくれ、もてなしのお

茶を用意している。私は長いすに腰かけ、彼の仕事有一段落するのを待っていた。ふと気づくと私たちの背後で一人の青年が一生懸命竹を削っている。何か竹細工でもやっているのだからか、王氏に尋ねたところ、寝台の上に敷くござを作っているところだという。このござは篋席と呼ばれるもので、浙江省地域では夏場の寝具としてポピュラーなものである。ちょうど日本で、暑さと汗のべたつきを避けるためイグサのござを敷いて寝るのに似ている。青年は風体変わった外国人が来ていることを少しも気に留めぬように、黙々と竹を削っていた。

家の主人である王氏に調査の趣旨を告げ、具体的に話を伺う前に、彼の飼育している動物たちを見せてもらうことにした。中庭の片隅にある小さく簡便なニワトリ小屋を見せてもらい、計測と写真撮影を行った。ついでに仕事に熱中する青年の姿も撮り、外を闊歩しているはずのニワトリを捜しに家の裏へまわった。放

し飼いにしているとはいふものの、その所有者はニフトリたちの大まかな行動範囲を把握しているようで、その技術に興味を引かれていた訳であるが、やはり王氏は迷つことなく自分のニフトリたちを見つけ出す。私は、地面に落ちていた野菜の屑などを啄ばみ歩くニフトリを、性懲りもなく再び写真を撮り始めた。すると背後で何やら、口論めいたやりとりが始まった。ふり返ると、そこには先程の青年が一枚の紙を手に持ち、通訳に必死になじかさを訴えかけている。

通訳に何事かと尋ねると、「どうやらさっき撮った写真が欲しい」とのことである。私は王氏へのお礼の写真と共にお送りする旨返答したのだが、それでも彼は納得しないようである。青年は一枚の紙を私に渡し、自分宛に送ってもらいたいと懇願し続けている。なんだ王氏の家族ではなかったのかと私は思い、帳面を破ってきたような一枚の紙にふと目をやる。そこには次のような住所と名前が書

かれてあった。「安徽省怀寧県大窪郷王祠村陳屋組／陳全明」。青年は、王氏の家族であるどころか、この村の人間でもなく、なんと隣の省からやって来た男だったのである。後でわかったことであるが、安徽省怀寧県はここ鳥石岫から直線にして五〇〇キロ以上もあり、到底一、二日では往來できぬほど離れている。そのような遠郷の地よりたどり着いた男に興味を持った私は、ニフトリの話などさつちのけで、この青年からこの地への来訪の事由について尋ねた。

#### 篾匠の生活

この青年、陳全明氏は、一九六六年九月二八日生まれというから、年の頃は二〇才後半の若者である。彼の従事している仕事は一般に篾匠と呼ばれ、かなり広い範囲を移動し稼ぐ、渡り職人である。篾匠は元来、竹製品を広く製作する細工職人であった。例えば、一〇年ほど前までは、米を運搬する箩框、魚伏せ籠魚罩なども作っていた。だが現在ではそれら

の需要はほとんどなくなり、篾席の注文を受けるのが中心になっている、中国でも近代化にともない、化学製品素材の利用が進展してきているが、篾席に関しては未だ竹製を良しとする風がある。陳氏は八才の頃から一七才まで、故郷で仕事を習った。同じ篾匠である父親がその師匠となり、父が渡り職人として家を空けている時は、親族中の先輩格に当たる人からその手ほどきを受けた。青年の故郷安徽省怀寧県大窪郷王祠村陳屋組は、この篾匠に従事するものが多く、彼の親族の約八〇％はこの仕事に何らかの関わりを持っている。但し、この仕事は專業ではなく、稲作とわずかな畑作も兼業している。陳氏の村では、一人当たり水田一公亩（アール）、畑地〇・三公亩の土地を分配されているという。

篾匠は年間八か月程家を離れ渡り歩き、農繁期や春節に故郷に帰る。陳氏は一八才の時に、年長者の仲間と同行する形で、初めて渡り職人として江西省南昌

市周辺を半年間歩いた。彼は、北は山東、河南、河北省、西は山西、陝西省、東は上海市、江蘇省、南は浙江、江西省の広い範囲を渡り歩いたことがあるが、主に原材料となる毛竹（モウソウダケ）が多くある浙江、江西、江蘇省を回る。篾匠が渡り歩く土地を選択する場合、この毛竹の有無ということが重要なファクターとなり、それ以外にも仕事仲間からの情報が行き先決定に大きく影響する。

陳氏は今年に入って、山西省太原市周辺を回っていた。そこには竹が少ないので、故郷から水竹を持ち込んで、北方の寝台に合わせ大きめの篾席を作った。六月末には一期作の稲刈りと二期作の田植えをするために、故郷に戻ったが、その時他の仕事仲間から浙江省の海岸沿いは経済発展が進んでおり、景気が良いという話を聞き寧波市周辺にやって来た。

篾匠は男女一名ずつが組み、多ければ五―六組が一緒に渡り歩く。陳氏は今回は単独一組で移動していた。陳氏のパー

トナー王小風氏（一九六八年七月三〇日生）は、陳氏の妻の妹である。彼女は私が調査に訪れた時には、王行海氏の作業小屋の中で静かに篾席を編んでいた。篾匠の男女は作業を分担する。男性は上把と呼ばれ、丸のままの竹を割り、削って篾席の材料作りを担う。一方、下把と呼ばれる女性は、それを編み込んでいく。移動経路の決定、取り引き先の確保、値段交渉などは男性の上把が行う。この上把と下把の組み方については明確にできなかったが、どうやら必ずしも親族がらみで組まれるものではなく、一旅毎に仲間て話し合って決定されるようである。ちなみに、この時陳氏の妻は、別の男性と組んで移動していた。陳氏と義妹は、売上げを六対四で分けることを、出発前に決めている。

陳氏は七月下旬義妹と共に王祠村を出た。バス、列車を乗り継ぎ鳥石岫近在の豊華に三日がかりで到着し、後は篾席を欲しい人はいないか声をかけながら歩き

始めると、早速、篾席製作の依頼者は見つかった。依頼されるとすぐに値段の交渉である。陳氏は幅四・五尺（約一・五メートル）以上のものは二五元、それより小さいものは二〇元で契約をとる。最初の家では、大きめの篾席を二枚注文され、篾席代五〇元と、材料の竹を入手すること、三泊の宿泊、食事の便宜を図ることを条件に契約した。陳氏たちは三〇キロ以上の重さになる篾席作りの道具類を持ち歩いているものの、材料の竹はないたため依頼者がこれを調達する。次の依頼者は最初の依頼者が紹介した。このように家を回るうちに、次の客を紹介してもらい順に回る。王行海氏の家にたどり着くまでに六軒、長いところで一週間（篾席七枚）滞在し、仕事を続けた。王行海氏の家には彼の弟からの紹介でやってきたという。ここでは三泊篾席三枚の契約を結んでいる。あと三か月程この地を巡回して帰郷する予定である。

#### 上把の工程

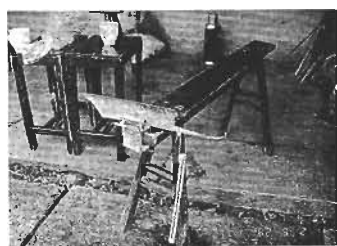
先に述べたように、竹を割り薄く剥し、一定幅のひも状（篾ミヤという）にするまで（劈篾ヒキミヤ）が上把の仕事である。材料となる毛竹は烏石彦では村が管理しており、王行海氏が買い取って入手した。毛竹の価格は一公斤（キログラム）〇・一三角で、一本約五元位になる。

上把はまず竹の枝葉を落とし、先端部と根本を鋸条（鋸ノコギリ）で切り取り、長さ一丈三尺（約四・三メートル）に揃える。これに篾刀（竹細工用の小型の鉋ノコギリ）で切れ込みを入れ、四つに割る。篾刀でそれを更に半分にし、内側の節を削り取る。それから割り続けて、一本の竹を三二本の竹片にする。次に、この竹片の幅を揃えるために勻刀（かなな状の道具）で縁を削り上げ、これを薄く剥す。この際、劈篾機という手回しの剥離機にかけるが、これは刃を締めつけるねじを調節することによって、剥ぐ厚さを変えられるようになっている。ここ浙江省などには毛竹が豊富にあるため、厚めの篾にする

ことができるが、その少ないところではできるかぎり薄くして、篾の数を増やす。今回の篾席は、毛竹の表面と内側の各一層をそぎ捨てたものを、さらに四層に剥して使っていた。要するに一本の毛竹から、三二×四＝二八本の篾をとつたことになる。通常は、七層に薄く剥離するので、三三×七＝二三四本の篾を確保するという。当然、篾は厚いほど丈夫で、篾席にした時に長持ちするわけで、今回は通常の一・七五倍の原材料を費沢に使っていたことになる。篾は、竹の表面に近い程弾力があつて、材質的に良いとされる。陳氏の故郷の安徽省では水竹という細竹しかないので、六層までしか剥離できない。

削り終えた篾は纏めて束ね、柔らかくするために沸騰した湯で三〇分程煮込む。その後軽く干して、表面のささくれを取るために、刮刀で削り仕上げ。この後上把は下把に仕事を預ける。

下把が篾席を編む作業を、打席ウチシヤという篾席の場合、素材の繊維を系化する（こ）がないため、編み方は単純な平織り、平組織になる。経糸にあたるものを横筋、緯糸に当たるものを真筋マシヤという。奇数の横筋、偶数の横筋と交互に手で持ち上げ、真筋を直交に通し編んでいく。この際、しっかりと編み込むために、竹筥ツクシヤという箆で真筋をたたき、編み目を詰める。竹筥は、割竹の一方を削りちようど刀状にした緯打ち具で、古くから織物に使われる刀杵と類似した道具である。



8、刮刀



5、勻刀で竹の縁を削る



1、鋸条（鋸）で竹を切りそろえる



9、刮刀で仕上げる



6、劈篾機で竹を薄く剥ぐ



2、篾刀



10、竹筥で編み上げる



7、篾を煮る



3、篾刀で竹を割り、削る



4、勻刀

4、耐性も優れるが、製作に時間がかかるため割高に設定する。浙江省地域では九皮はほとんどなく、八皮、七皮にする場合が多い。篾の幅は、上把が依頼者の意向を聞いて、勻刀で削る時に刃間を調節することによって斟酌する。

篾席の縦の長さは約六尺（約二メートル）に決まっているが、横幅は寝台によって違ってくるので、依頼人の要望を聞かねばならない。先にも述べたように幅の広いもの程手間がかかるため、製作費を多く取った。王小風氏の場合、四尺幅の篾席には、編むだけで約九時間、四・五尺幅のものは約一時間の製作時間を必要とする。篾席全体の幅とともに、篾

自体の幅が製作時間の多少に影響を及ぼすが、九皮の場合、一日で編み上げることはできない。通常の一日の作業は、朝六時に始まる。六時半から三十分間朝食、十時半から一時間厚食、三時に十五分間の休憩、五時半から三十分間夕食という休息時間をほさみつつ、一枚の篋席を完成させるまで作業を続けるという。

編み始めの篋は湿っていて柔らかく編みやすい。しかし、時間がたつと乾いて固くなり、折れやすくなるので、水を吹きかけながら一本一本編んでいく。そのため下把の傍らには、口に含む水がいつでも置いてある。

### 篋匠の活動圏の伸縮変化

以上のように、篋席は男女が一組でそれぞれ役割分担をしながらひとつの製品を完成させる。この分担が厳格な分、それぞれの担う技能の違いが厳格になっていく。つまり、上把、下把はそれぞれの作業を担えないわけで、必定この男女のパートナーシップが重要視される。長期

にわたる同行を必要とし、金銭的にも共同会計をとるため、この相手との関係性が問題になるのである。それ故、うまくパートナーを見つけれず、故郷の村から渡りに出られなくなる場合もある。また、家庭の事情で長期渡りに出られない場合も往々にしてある。そのような時は、地元で残っているもの同士で篋席を製品化し、近隣の市場で売買したり、男性の場合、製品を集めて竹の取れない地方まで行商に赴くこともある。その際の販売価格は、篋席一枚六〇〜七〇元と渡りで作るよりも二倍以上割高に設定される。

しかし、売上げ自体は、渡りで得られる金額に遠く及ばないといわれる。元々、篋匠の行動範囲は固定しえない。何故なら篋席はうまく使うと五〇年以上もの耐用年数を持ち、一度作ってしまうと、次の需要はかなり先になるからである。従って、「お得意」、「馴染み」といった固定的な顧客関係が取り結びにくく、渡りの範囲は流動的になるのである。し

### 会場ニュース

シンポジウム「動く映像とミュージアム」

博物館映像の将来構想」の開催決まる  
△日時▽一九九四年六月二十五日(土)〜二十六日(日)△場所▽川崎市市民ミュージアム  
△参加呼掛け対象▽博物館・美術館・動物園・水族館などの学芸員、生涯学習の担当者。事前登録制。一〇〇名予定。△参加費▽無料。ただし旅費・宿泊費・懇親会費などは参加者の自己負担。

●第一部 第一部 動く映像 利用の現状と将来展望 基調報告 坂根徹夫(慶応大学) 各館からの事例報告 1、マルチメディア 2、映画文化と保存 3、美術館の画像ドキュメンテーション 4、学術研究への映像利用の将来 5、インタラクティブ展示 6、放送番組の保存と活用

●第二部 第二部 ワークショップ 博物館における映像 集める 作る 見せる 第三部 博物館と映像による動態記録保存 記念講演 地域文化と映像記録 宮田登(神奈川大学) 各館のパネルによるパネルディスカッション 音楽、まつり・芸能・行事、産業考古学、都市、考古 郷土史・暮らし、美術、地域社会のドキュメンタリー、環境・自然 お問い合わせ先 下中記念財団〇三―五二六―一五六八八 川崎市市民ミュージアム 濱崎好治宛 〇四四―七五四―四五二六

### 編集後記

五月の大型連休も終り、大学キャンパスもなんとなく落ちつきを取り戻した感じがする。我家をとりまく遠菜の山々の緑もすっかり深まり夏近しを思わせる。

今朝は水けをふくんだ赤味を帯びた空気が重苦しい。昨年までは我家に通じる崖のあちこちに白ユリが浮き出し、その香がたまたま梅雨の匂いを感じるのだが。

景気対策かなにかは知らないが、我家をとりまく谷戸は崖崩れ危険地帯に指定され、コンクリートでかためられてしまい、白ユリの群生もつぶされてしまった。

毎年、雨季には小規模な崖崩れがあり、道路をふくぐ土を始末するのに苦労するのだが、危険を感じるのはどこもなかった。まあ、地主がOKしたこともあり、近々、足腰が弱くなることを思うと、工事をすることも言えない。私達が住んで居なければこの工事も必要ないのだから、人間と自然が調和をとるのはむずかしいものである。よき様の土地に行くとは海岸線を堤防でくまなくとも良いものぞと思っただが、住んでいる住民にと

かし、それでも篋匠の渡りへの志向性は強いようである。

陳氏の場合も、毎年その移動の地域、経路は異なるし、今までに何度も渡りに出られずに篋席売をやった経験を持つ。篋匠の移動範囲と営業形態の伸縮、変化は、恒常的にこの生業を継続するための適応であるが、この可変的な匠人(職人)の在り方は今後、技術史研究の中で大いに問題にせねばならない。

ともあれ、多分もう二度と出会うことができないであろう陳氏だが、今どこかで活躍しているのか気になるころである。(なお本報告は福田アジオ代表平成四年度国際学術研究「環東シナ海(東海)農耕文化の民俗学的研究」の調査成果の一部である。)

つては津波が来た時を考えれば護岸工事をせざるを得ないのであろう。

これまでの夏より強いかも知れない。自然の神様にお灸をすえられたらと思っただけで我慢しよう。

いかにも安あがりな、殺風景な壁面を見ていると、少しは自然との調和を考えた工法がとれないものかと思ってしまう。せめて、所々に穴でも開けておけば木や草も生え、つたがかぶり、自然の風情が守れるのだが。

こんなことを考えているとだんだん心が沈んでしまう。就職にとり組む学生の顔も、受け入れ側の財界人の顔も生気がない。誰よりもゆうつなはずの永田町の先生方は結構楽しそうに見えるから不思議である。金まみれ、うそまみれになっているのにサツカークじ、トトカルチョを決めると言っただから恐れ入る。ヤクザや暴力団がビストルを持ち歩き、総会屋がのさばる環境を掃除しないで、トトカルチョなど始めて良いのだろうか。なによりも自分達の体をきれいにしているから始めてもらいたい。健全なはずのスポーツが金と泥にまみれる姿だけは見たくないし、子供達に見せたくない。